

琵琶湖博物館第3期リニューアルの実施設計案について

1 A展示室

湖の400万年と私たち ～変わる大地・気候・生き物～

現状

「過去の琵琶湖とその集水域の環境」を中心とした展示



リニューアル後

「現在の環境が過去からの一連の変化によって成り立っている」との視点で紹介する展示

新展示のねらい

過去の様々な環境変化の結果としての現在と、現在が未来への途中にあることを認識することにより、地域の環境を考えるきっかけとなることを目指す。

【象徴となる新展示】

○ 世界初！化石巨大象の生体・骨格復元登場！

現在地球上にいる象よりも巨大であった太古の象（コウガゾウ、高さ約4m）の組み立てられた骨格化石に、筋肉のつき方などの学術的検討から、左半身に生体を復元し半骨半身標本として展示。



左半身に肉付けされた骨格標本で、当時の重量感や大きさを実感してもらうとともに、両側を見比べることで化石から過去の姿を推定することの面白さを知ってもらう。

○ 地層から迫る琵琶湖の 400 万年史

日本最古の湖、移動してきた湖などの琵琶湖の不思議な生い立ちについて、その情報が詰まっている地層展示を通してわかりやすく解説。巨大象やワニがすんでいた環境など、琵琶湖が残してくれた地層から、その研究方法も含め、地形模型や体験型展示と合わせて、その謎にせまる。



饗庭野断層(高島市教育委員会 蔵)

地層標本

- ① 堅田湖の時代の地層
- ② 川の時代の地層
- ③ 蒲生沼沢地の時代の地層
- ④ 大山田湖の時代の地層1
- ⑤ 大山田湖の時代の地層2



これまであまり目にすることがなかった地層標本と、わかりやすく紹介するための模型や体験型展示を通して、琵琶湖の不思議さ、面白さを再発見してもらう。

- ◆ 琵琶湖の底をつくる地層を引き上げる調査体験！
- ◆ 琵琶湖の地下に眠る、湖ができる前の山地を観察！
- ◆ 琵琶湖の誕生に関係する断層の動き方を観察！



〈地層模型を引き上げて調査体験〉



〈山地模型を手にとって観察〉

2 B展示室

湖の2万年と私たち ～自然と暮らしの歴史～

現状

「人間活動」を中心とした展示



リニューアル後

「人と自然環境とがどのように関わってきたのか」、その歴史を学ぶことができる展示

新展示のねらい

自然環境と私たちの暮らしの歴史を振り返ることにより、地域の環境と自治を考えるきっかけとなることを目指す。

【象徴となる新展示】

○ 新展示へいざなう、眼前に浮かぶ伝説の龍

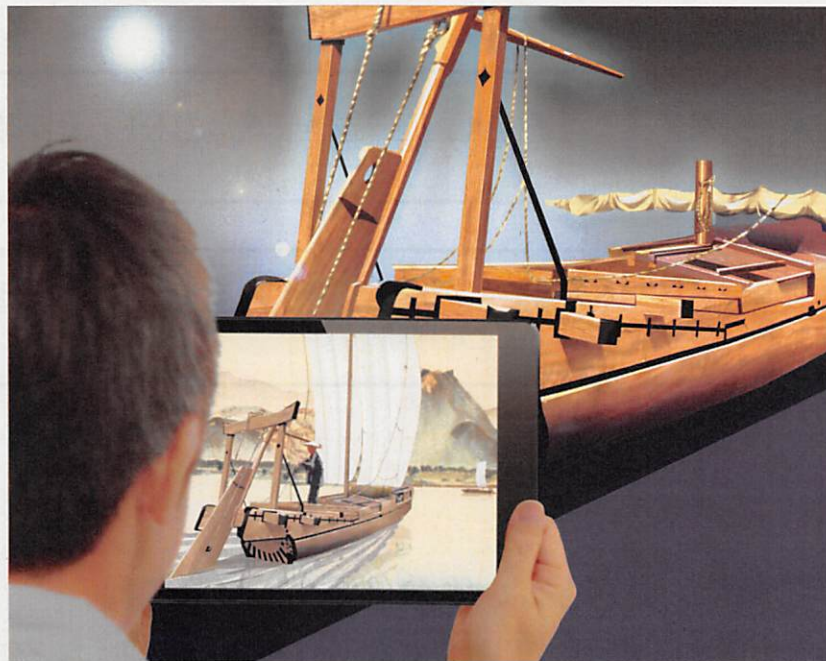
滋賀県選択無形民俗文化財である「近江の竜王信仰」などにみられる湖や水のシンボルである龍を取り上げ、展示室入口に巨大な龍が雷鳴とともに来館者を出迎えるように展示。龍は、展示室の随所に登場して案内する。



人が感じた自然への恐れを示す「龍」を展示し、龍（自然）の目線からも暮らしの歴史を振り返り、これからの人と自然の関わりを考えるきっかけとする。

○ 展示室の丸子船が湖に浮かび、江戸時代の風景が広がる！

展示室で突然、巨大な木造船（丸子船）が10mを超える高さの帆を張り、湖に浮かびあがる。AR（拡張現実）技術を用い、タブレット端末やスマートフォンを通して、湖を帆走する丸子船と、江戸時代の湖周辺の風景を、当時描かれた「真景図」で再現する。



「真景図」から読み取れる江戸時代の風景と、現在の風景との違いを通して、人の暮らしと環境の変化について考えるきっかけとするとともに、物資の流通や人の移動に重要な役割を果たしていた丸子船を通して、かつての湖と人間の関わりを振り返ってもらう。

◆ 丸子船を間近に見て、触れてホンモノを体感！

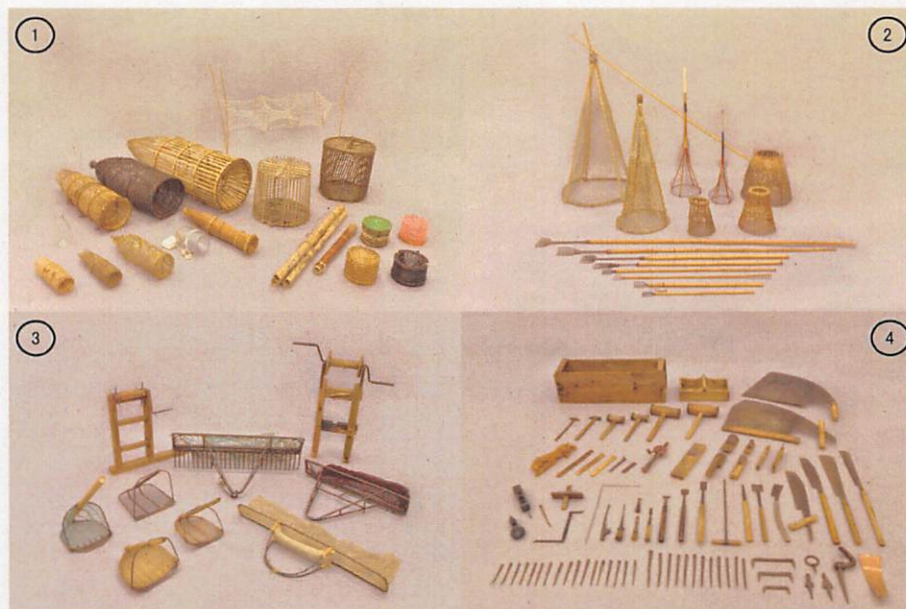
- 実物の丸子船（国登録有形民俗文化財）の船首から船尾まで触れることでスケールを体感できる
- レリーフに触れることで全体の立体構造の特徴を実感できる

◆ 丸子船の美しい舳先の模様と一緒に撮影！



○ 滋賀県初の国登録有形民俗文化財を展示

- ◆国内最大級！琵琶湖の漁業の多様性を示す漁撈用具コレクション
（「タツベ」「ヒガイ笥」「ウナギ筒」「ヤス」「ジョレン」など）
- ◆湖では国内最大級の木造船をつかった船大工道具コレクション
（「ノコギリ」「ノミ」「カンナ」「船釘」「槌」など）



〈①～③漁撈用具〉〈④船大工道具〉

○ 琵琶湖ならではの漁を体験・体感！

- ◆はるか沖合から地曳網を巻き取る「ロクロ」に触れて漁を体験
- ◆大量の「エビタツベ」を使いこなす漁師の原寸大ジオラマで、漁の現場を体感

